



## 貨幣の世界 —— 最終回

貨幣同士の識別を簡単にしたり、偽造しづらくするために、さまざまな形が採用されることがあります。最終回となる今回は、近代以降を中心とした穴(孔)開き貨幣、さらに変わった形の貨幣をご紹介します。

### 形

その7

# 現代の貨幣 国もいろいろ形もいろいろ (5)

### 穴開き貨幣

日本で日常的に使用される五円貨と五〇円貨には穴が開いています(有孔と言います)。こうして貨幣に穴を開けるのは、①他の貨幣との混同を避ける、②偽造防止対策、③原材料費の節約、のためだと言われています。

さて、普段から五円貨や五〇円貨を使っているわれわれ日本人にとって、穴開き貨幣はなじみ深いものです。ところが、世界に目を転じると、現在日常的に使う貨幣のデザインに穴開きを採用している国は、それほど多くありません。二〇一八年末時点で日常的に使用される貨幣として穴開き貨幣を発行しているのは、日本以外では、デンマーク、最近まで発行されていた国を加えても、ノルウェー、フィリピン、パプアニューギニアくらいです。

写真1 日本 50円ニッケル貨・無孔 (1955～58年発行)



(直径 25mm、重量約 5.5g)

写真2 日本 50円ニッケル貨・有孔 (1959年～66年発行)



(直径 25mm、重量約 5g)

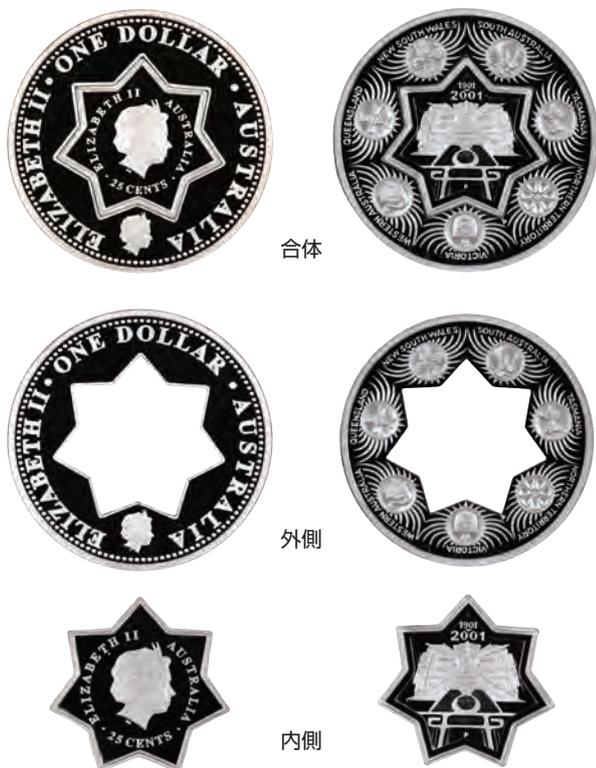
50円貨については、穴開きではないもの(写真1)が発行された際、同じ時期に発行された100円貨と区別しづらいという声があり、穴を開けたものが発行されました。以後、サイズやデザインが変更された後も、穴開きが踏襲されています(写真2)。(写真提供:独立行政法人造幣局)

写真5 フィリピン 5センチモ銅メッキ銅貨  
(1995～2016年発行)



鉄を銅で覆った貨幣です。表面には数字と「フィリピン共和国」、裏面には「フィリピン中央銀行」の文字が刻まれたシンプルなデザインです。2018年3月からは、穴がない5センチモ貨に変更されており、この穴開き貨幣もいずれ日常的に目にするとはなくなるでしょう。(直径15.5mm、重量約1.9g)

写真6 オーストラリア 外側1ドル銀貨、内側25セント銀貨  
(2001年発行)



合体

外側

内側

穴開きの記念貨幣あるいは収集用貨幣は他にもありますが、穴が星形かつ2つの貨幣に分離するものは他にはないようです。(外側：直径40.4mm、重量約31.1g、内側：直径24.8mm、重量約7.8g)

こうしてみると、五円貨や五〇円貨が、貴重な貨幣に見えてきませんか？

**変わり種**

記念貨幣や収集家向けの貨幣は、実用を念頭においていないことから、実にさまざまな形の貨幣があります。

左下のオーストラリアや次頁上のラトビアの貨幣は二つに分離します。次頁下のオーストラリアやフランスの貨幣もそれぞれ変わった形をしています。続いては、そうした変わった形の貨幣をご紹介します。

写真3 デンマーク 5クローネ白銅貨 (2002年～発行)



デンマークでは、5クローネ白銅貨のほか、1クローネおよび2クローネ白銅貨も穴開き貨幣です。貨幣のデザインにはデンマークの国章にあるハートマークに加え、デンマーク女王のマルグレーテⅡ世のイニシャルをあしらった模様(M II)が描かれています。(直径28.5mm、重量約9.2g)

写真4 ノルウェー 5クローネ白銅貨 (1998～2012年発行)



ノルウェーでは、5クローネ白銅貨のほか、1クローネ白銅貨で穴開き貨幣が発行されていました。同国では、デンマークと同じ「クローネ」という名称の通貨単位が用いられています。この「クローネ」とスウェーデンの通貨単位「クローナ」、そしてかつての英国の通貨単位「クラウン」のいずれも、「王冠」という意味です。(直径26mm、重量約7.9g)

## おわりに

今回で、あしかけ三年にわたる「貨幣の世界」も最終回となります。

古代から現代まで、多角形や穴開き・不思議な形の貨幣など、さまざまな貨幣を紹介してまいりましたが、いかがでしたか。

これまでご覧いただいたきたとおり、貨幣は、歴史家のヘロドトスや司馬遷しはせんが生きていた二〇〇〇年以上も昔ですら起源が不明なほど長い歴史を持っています。

この連載をきっかけに、貨幣やその歴史に多くの方が興味を持ってくださればと思います。

写真7 ラトビア 1ラツ銀貨 (2012年発行)



ラトビアはバルト海沿岸の北欧の国です。18世紀にロシアに併合されましたが、1918年に独立を宣言しました。しかし1940年にソビエト連邦(現・ロシア)に占領され、ソビエト連邦が崩壊した1991年に再独立しました。写真の1ラツ銀貨も、写真6のオーストラリアの星形穴開き銀貨と同様に、収集家向けの分離する貨幣(あるいは2つの貨幣の組み合わせ)です。ラトビアの首都リガに位置するリガ工科大学の創立150年を記念して発行されたもので、製図に使う定規やコンパス、分度器を模した独特の形をしています。

(直径32mm、重量約26g)

写真9 フランス 1フラン銀貨 (2001年発行)



2001年のユーロ移行直前に発行された「最後の1フラン銀貨」です。一見すると平板な円形のように見えますが、横から見ると「~」の形のように縁以外が波打ったような形をしています。

(直径32.5mm、重量約17.8g)

写真8 オーストラリア 1ドル銀貨 (2013年発行)



国の形をした貨幣もいくつかの国で発行されていますが、その代表例としてオーストラリアをご紹介します。写真のカラーコインはオーストラリア固有の動物をデザインに採用したシリーズの一つです。写真のカモノハシの他にもコアラやカンガルー等の動物がデザインされた貨幣が発行されています。

(重量約31.1g)

## お別れの貨幣たち

欧州諸国は長年繰り返された戦乱の経験をかえりみて、第二次世界大戦後、域内交通の自由化、法律の整合性の推進、共通市場の創設等を進めました（その歩みについては、本誌39号「対談」記事をご覧ください。右QRコードからアクセスできます）。



そして2001年、ついに通貨の統一に踏み出しました。ユーロの誕生です。これは、ユーロ採用国にとっては、長い歴史を反映したその国の貨幣単位が消えることを意味します。そこで、写真9のフランスの1フラン銀貨同様に、いくつかの国では、「最後の」と銘打った自国通貨単位の貨幣を発行しました。その中から2つをご紹介します。

オランダは、日常的に使われていた1ギルダー白銅貨を1999年に金貨で発行したほか、

2001年にニッケル貨（写真：最後のオランダ・ギルダー）も発行しました。デザインは、表面がベアトリクス女王、裏面はオランダの国章にも描かれているライオンが国旗を持っている絵を子どもが描いたものです。

またドイツでは、日常的に使われていた1マルク白銅貨（写真：通常のドイツ・マルク）を、2001年に金貨（写真：最後のドイツ・マルク）で発行しました。同国ではプロイセン王国によって統一されたドイツ帝国時代（1871～1918年）以来の金貨発行でした。

デザインは一見すると似ていますが、裏面にある文字が、白銅貨の「BUNDESREPBLIK DEUTSCHLAND（ドイツ連邦共和国）」ではなく、金貨では「DEUTSCHE BUNDESBANK（ドイツ連邦銀行）」となっています。

最後のオランダ・ギルダー

1ギルダーニッケル貨  
（直径25mm、重量約6g）



通常のドイツ・マルク

1マルク白銅貨  
（直径23.5mm、重量約5.5g）



最後のドイツ・マルク

1マルク金貨  
（直径23.5mm、重量約12g）



（写真1・2をのぞき写真はすべて個人蔵）